



Title	社会科学教育教材としての陪審制映画『裁きは終りぬ』
Author(s)	和多, 則明
Citation	大阪外国語大学論集. 2004, 30, p. 177-196
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79939
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会科学教育教材としての陪審制映画『裁きは終りぬ』

和多則明

A French jury movie, *Justice est faite*, as teaching materials for scientific education in college

WADA Noriaki

Nous avons déjà analysé, dans quelques articles, plusieurs mérites qui consistent dans l'utilisation des matériels pédagogiques en images, surtout des films, au cours des travaux pratiques de l'université. D'après ces analyses, ils sont plus importants que ceux en lettres pour l'enseignement supérieur nouveau maintenant exigé au Japon qui s'est approché économiquement de l'Occident, mais qui reste toujours un des pays non occidentaux.

Dans la plupart des pays non occidentaux, où la pensée scientifique n'aurait pas suffisamment de racine non seulement dans la culture traditionnelle mais aussi dans les vies quotidiennes actuelles, c'est-à-dire où les sciences et les esprits de science restent les choses importées de la civilisation occidentale qui n'auraient pas de relation avec leurs réalités actuelles, les matériels pédagogiques en images, par lesquels les étudiants peuvent réfléchir sur la manière de pensée scientifique en la liant avec la réalité, doivent jouer un rôle déterminant dans l'enseignement scientifique.

Parmi les films français divers, on peut trouver quelques matériels pédagogiques en images très efficaces pour cet objet. Un des meilleurs matériels, c'est le genre des films qui est réalisé sur le jugement dans le système de jury : par exemple, *Justice est faite*. Puisque ce genre de films présente beaucoup de problèmes essentiels pour comprendre scientifiquement la réalité.

Cet article a pour objet d'apprécier les mérites et les défauts d'un film français : *Justice est faite*, comme matériel pédagogique, en le comparant indirectement avec un film américain : *Douze hommes en colère*, et avec un film japonais : *Douze gentils japonais*, qui sont aussi réalisés autour du jugement dans le système de jury.

－ 目次 －

序論

(1) 映画の概略と学生達への質問事項

(2) 学生達の回答の分析

結論

序論

本稿の目的は、陪審制（正確には参審制）をストーリー展開の基礎として作られたフランス映画『裁きは終りぬ』を授業中に観た後で学生達が記入した質問事項を分析することにより、この映画が社会科学教育のための基礎教材としてどのような意味を持っているかを明らかにすることにある。（科学的思考はそれ自体としては、科学のジャンルを問わず共通と考えられることや、簡潔にするという目的のため、以下、「社会科学教育」ではなく「科学教育」と表示する。）

大学の授業で劇映画を用いることの意味については、すでにいくつかの論文で明らかにしてきた¹⁾。それらの分析結果からいえば、現在の日本の高等教育に課せられた目的の実現のためには、文字教材以上に映像教材は重要な意味を持っていると考えられる。特に日本を含む非ヨーロッパ諸国のように、科学的思考法が必ずしも伝統的文化や、現在の日常生活現実そのものの中に十分な基盤をもっておらず、それゆえ、科学そのものが現実と無関係か関係の薄い輸入文化的側面を強く持たざるを得ない社会においては、文字教材よりも一層現実に近いゆえに現実とつなげて科学的思考法について考えることができるような劇映画は、科学的思考法をその文化的現実の中に組み込んでいくために重要な役割を担っていると思われる。とりわけ、正確な事実認識と論理性、すなわち科学的思考が求められる裁判をストーリー展開の基礎とした劇映画は、科学的思考法の現実的基盤を示すことによって、科学そのものが生み出される文化的・社会的・人間的原因を教える可能性がある。それゆえそれはまた、ヨーロッパが生み出したような科学的独創性を、非ヨーロッパ諸国自身が生み出す基盤を作り出すことに役立つ可能性があるという仮説を立てることもできるだろう。そのような位置付けの中で、映画『裁きは終りぬ』の教材としての意味を明らかにする。

なお、授業では、フランス文化の特徴を他の文化と比較することでより一層明らかにするという意味もあって、フランス以外の国において作られた陪審制映画を連続して観る場合がある。そこで本稿でも、今後執筆予定のアメリカの陪審制映画『12人の怒れる男』や日本の陪審制映画『12人の優しい日本人』についての論文と密接な関連を想定しつつ問題を明らかにしていく。

(1)映画の概略と学生達への質問事項

フランス映画『裁きは終りぬ』(原題: *Justice est faite*) はアンドレ・カイヤット監督によって1950年に作られた陪審制をストーリーの基礎とする映画である⁽²⁾。本人の依頼に基づいて愛人を安楽死させた女性医師エルザが殺人罪にあたるかどうかの判断をめぐってストーリーが展開していく。同じように陪審制をストーリーの基礎とするアメリカ映画の『十二人の怒れる男』や日本映画の『12人の優しい日本人』が、ほとんどすべてのシーンが裁判所の一部屋での陪審員の議論に終始しているのに対して、このフランス映画の場合は、陪審員の議論そのものはそれらに比較して少なく、むしろ、各陪審員の私生活がより詳しく描かれている点に特徴がある⁽³⁾。アメリカ映画の『十二人の怒れる男』⁽⁴⁾よりも作られた時期が古いことや、いくつかの賞を受けたことを考えても、この映画が『十二人の怒れる男』に何らかの影響を及ぼした可能性が高いが、それを証明するものは見つけ出せていない。また、日本映画の『12人の優しい日本人』⁽⁵⁾に影響した可能性も考えられ、そのことについて示唆する証拠がいくつか見出せるが、その点については当該論文において触れることにする。

映画は、ある農民が陪審員に選ばれたという通知を受け取る場所から始まり、被告エルザへの有罪判決が出ることで終わる。途中、上に述べたように各陪審員の私生活がオムニバス的に描かれているが、後述するようにそれらはこの映画のストーリー展開や製作意図と密接な関係を持っている。

このフランス映画を観た授業は、1・2年生向けに開講されている「フランス研究入門2」という2002年度の授業である。その授業は、3・4年の専門的な授業の前にフランス研究への導入的役割を持たせて設定されている授業であるため、受講生のほとんどは、1・2年生である。授業では基本的に、新しい大学教育の模索のため実験的にフランス映画をできるだけ教材として選んで授業を行っている。たとえば、2002年度に学生達が観た陪審制映画以外の映画は、『マルセルの夏』、『愛と宿命の泉』、『愛の翼』などである。受講登録数は、最初は124人であったが、『裁きは終りぬ』を観て質問に答えた学生はそのうちの79人である。内訳をみると、外国語としてフランス語を選んでいる学生は44人(55.7%)である。他の外国語を選んでいる学生もこの授業を受講できるようになっているため、フランス語以外のさまざまな外国語専攻の学生が参加している。次に、昼間主と夜間主という所属別でみると、79人のうち夜間主所属の学生が23人であり比率にすると29.1%になる。夜間主所属の学生の中には社会人特別選抜で入学した学生も含まれるので、相対的に高齢の学生も質問への回答者の中には含まれている。その意味では質問の回答は、20才前後の若い世代の回答を忠実に示しているのではないことになる。

男女別でみると、63人、すなわち受講者全体のうちの79.7%が女性である。このことはこの『裁きは終りぬ』という映画の場合には、後述するように重要な意味を持っている。

学年別でみると79人のうち60人、すなわち75.9%が1年生、18人(22.7%)が2年生であり、1人だけ4年生が含まれている。そのことから、大学教育の影響が相対的に少ない学生達から構成されるといえるだろう。したがって、高校生に同じ映画をみせても類似

の結果がえられる可能性がある。

そのような構成からなる学生達に、まず陪審制についての説明を行い、NHKのニュースで流れた日本で予定されている参審制についての紹介ビデオを見せた上で、2002年10月21日と10月28日の2回に分割して映画を観ている。そしてすべて観終わった直後に質問事項と回答用紙を配布し、記入を要請している。そのときの質問事項は次のとおりである。

- ①この映画を観て感じたこと（面白かったかどうかを含めて）を書いて下さい。
そのあと、なぜそのように感じたかの理由も書いて下さい。
- ②この映画の登場人物の中で最も好きな人は誰ですか。また、その理由は何ですか。
- ③この映画ではどうして登場人物の私生活が描かれているのでしょうか。
- ④この映画の中で、「偶然」について触れられているシーンをすべて上げて、なぜそのように描かれているか考えて書いて下さい。
- ⑤この映画の中で女性と男性はどのように描かれていますか。そこから、この映画の製作者は女性についてどのように考えていると推論できますか。
- ⑥この映画から、人間が事実や現実を正確に認識するときに何が最も大きい障害になると考えることができますか。
- ⑦この映画で、陪審員の夫婦の障害児についての描かれ方や、カフェのボーイとタクシーの運転手との乱闘シーンの描かれ方に共通することは何であり、それはなぜでしょうか。
- ⑧この映画の中で、骨董品の商売をしていて、犬を連れてきているマダムはどのような意味を持っていると考えられますか。
- ⑨カフェのボーイはこの映画の中でどのような意味を持っていると考えられますか。

これらの質問の目的の一つは、学生達の感受性や観察力のレベルを測定することにある。これまでの経験からいうと、一つの映画を観てその中のどれだけのシーン、またはどのようなシーンを記憶しているかということは、その学生の感受性の鋭さや観察力の鋭さのレベルを示していることが多い。上の質問のほとんどは、直前に観た映画のシーンの記憶を前提としており、記憶していなければ答えられないか、映画とは直接関係のない答えしか出せないことになる。映像を教材として使った場合の重要な意味のひとつはそこにあるといえるだろう。文字教材の場合、たとえば文学作品であれば、どちらかという想像力が重要な役割を果たすのに対して、映像教材の場合には想像力以上に感覚的な鋭さが求められる。そしてそのような感覚的鋭さは、現実や実験の中から何かを学んだり発見したりするときには不可欠の力であろう。そのような力を養うトレーニングとしても映像教材は重要である。

質問の別の目的は、感覚でとらえたことを根拠にして、感覚ではとらえられないことについてどれだけ推論を立てられるかという推論力のレベルを測定することにある。質問

の中で③以降の「なぜ」とか「どうして」という問いがそれである。映画のどこをみてもその答えを直接見つけることはできないから、映画のシーンを根拠にして推論を組み立てて答えを出す以外にないことになる。

なお、これは二次的目的ではあるが①と②の質問の目的は、自分の感情の根拠を問い返すことによって自分の感情をもう一度とらえなおすという自己対象化である。この作業はおそらく、感情にとらわれないということや、さらには理性的意志を持つための基礎作業に位置付けられるのではないと思われる。もし、現在の若い世代が、感情にとらわれて我を忘れるという傾向が強まっているとすれば、この基礎作業はより重要な意味を持つであろう。それは劇映画を教材として用いることの別の目的となる。

(2) 学生達の回答の分析

以下、先述した質問に対して79人の学生達がどのように回答しているかを質問項目の順に見ていくことにする。

- ① この映画を観て感じたこと（面白かったかどうかを含めて）を書いて下さい。そのあと、なぜそのように感じたかの理由も書いて下さい。

この質問に対しては、自由に感想を書いてもらうためにあえて質問内容を限定しなかったため、回答としてさまざまな感想が書かれている。そのため単純な集計はほとんど意味がないが、参考までに集計結果を記すと、まずこの映画について「面白い」という言葉を用いて感想を書いている回答者数は28人である。面白いと思った理由はさまざまである。たとえば、陪審制そのものへの興味が理由である場合もあれば、安楽死についての興味が理由である場合もあれば、陪審員の私生活が描かれていることが理由であるといったようである。他方、「面白くない」という言葉を用いて感想を書いている回答者は11人である。その理由として挙げられているのは次のようなものである。

- ・ストーリーがわかりづらかった。
- ・暗く重たい内容であるから。
- ・有罪か無罪かの最後の結論がはっきりしないから。

今回の場合、人数的には、面白くないと書いている人の方が面白いと書いている人の数より少ないが、質問をより限定して、面白いか面白くないかという選択肢だけにした場合、人数の関係は逆転する可能性もある。そのことは別稿で、アメリカ映画『十二人の怒れる男』への反応を考察することによって明らかになる。

ストーリーがわかりづらいことが面白くなかった理由として挙げられているが、面白くないとまでは書いていないが、ストーリーがわかりづらかったと書いている回答者は全部で10人になる。陪審員の私生活がオムニバスのように描かれていることもあり、また、私生活

の中では陪審員以外の登場人物が加わるため、一人の私生活をより短時間で理解することが求められる。そのためストーリーがわかりづらいという感想は十分な根拠があるといえるだろう。

この質問への回答の中からいくつかを紹介すると次のようになる。

「正直言うと、私は陪審員の7人全員をきちんと見分けられなくて、誰が最終的にどういう決断を下したのか、全員が全員はわからなかったのもう、もう何度か見てみないとこの映画の深いところまで探ることは今の私にはできないと思いました。」

「すごくわかりにくい映画だった。途中で急に話が飛んで場面が変わったりするし、登場人物同士の関係も途中で良く分からなくなった。」

「この映画は見ている途中は、どういう結末になるか興味深くおもしろかったが、結末は後味の悪いものであった。結局、被告エルザが何を考えて殺人を犯したのか分からなく、何が正しいか分からないからだ。」

「思ったよりおもしろかったけどなんかすっきりしない感じが残った。」

「真実の見えぬまま終わるところにもこの映画の奥深さを感じました。もっと何度も見てみたいと思う映画でした。」

「非常な興味を持って最後まで固唾を呑んで見つづけた。」

「裁判、参審制のあり方が様々な角度から描かれていておもしろかった。」

映画を観たあとに学生達を書く文章はほとんどの場合、これらの回答と同じ特徴を持っている。すなわち、対照的な感想や意見が出てくるということである。この映画の結末に不満を感じる学生もいれば、逆にそこに奥深さと余韻と考える貴重な素材を見つける学生がいる。また、この映画を分かりにくいと感じる学生もいれば、分かりにくいとはまったく感じていない学生もいる。これらの分かれ方こそ、芸術の世界における個性の多様性を示すものでもあるし、映画というものを、受け止める観客の主観的感情の側面から分析することの困難さや不可能性を示すものでもある。たとえば、あるシーンやカメラワークがどのような意味を持っているかについては、観客へのアンケート調査と推測統計学的分析なしには、科学的分析ができないことになる。おそらくこの点については、映画分析だけではなく、文学分析についても同じことがいえるだろう。たとえば、作家のある文章を読み手がどう受け止めるかを、研究者一人の判断によって明らかにすることはできない。その作家の文章をできるだけ多数の人間に読んでもらってアンケート調査を実施し、推測統計学の原則に従って分析することが不可欠であろう。

すでに別稿で分析したので、このような多様性が科学教育において持っている意味についての考察は、本稿では省略する。

②この映画の登場人物の中で最も好きな人は誰ですか。また、その理由は何ですか。

この質問への回答を集計し多い順にならべると次のようになる。

陪審員であるカフェのボーイ (ギャルソン)	17 人
被告のエルザ	15 人
陪審員である骨董商のマダム	14 人
陪審員のボーイの恋人	8 人
陪審員である軍人	6 人
被告エルザの愛人クレメール	5 人
陪審員である農民	4 人
裁判長	3 人
陪審員である、障害児の父親	2 人
被告エルザの義理の妹	1 人
記入無し	4 人

この映画の主要な登場人物のほとんどが上がっているが、これは、主人公と呼べる決定的人物がいない、他の二つの陪審制映画にも共通することであると考えられる。ただ、逆に主人公を絞れないことが、映画を分かりづらくしている一つの原因でもあるだろう。

それらの登場人物を好きな理由についてみると、まずカフェのボーイについては、ほとんどの学生が、その「人間らしさ」を指摘している。陪審員に選ばれたことによってその仕事に誇りを持ち、誠実に論理的に判断を下そうという姿勢を持っている一方で、タクシーの運転手と口論になりさらには殴り合いになるという感情的側面を持っていることが、学生達の心をひきつけている。それとともに、テーマが裁判であり、組み込まれたエピソードもどちらかといえば暗い感情を引き起こす可能性があるものが多い中で、比較的明るい感情をボーイが与えるということも理由の一つである。仮説としていえば、より広範囲の日本人を対象とした同じようなアンケート調査を行っても、結果は学生達の回答と類似のものである可能性も考えられる。しかし、欧米人に対してアンケート調査をした場合も結果が同じかどうかについては、疑問がないわけではない。その意味では、同じ映画を観たあとでのこのような調査はその国の文化を反映する可能性があり、ある文化を科学的に明らかにするうえで比較調査が重要な意味を持つことになるだろう。

被告のエルザが2位になっているが、学生達が彼女を好んでいる理由は、その知性的で毅然とした態度にある。この映画の中の登場人物をあえて二つのグループに分けるとすれば、感情的な言動が中心となっている登場人物と、理性的な言動が中心となっている人物に分けられるが、エルザは映画の中では自己の感情をほとんど示さず、理性的な言動が中心となっている人物の一人である。そのエルザが2位に来ていることは、科学教育の立場から学生達の好みを知るデータとして重要である。なぜなら、科学教育における重要な教育課題の一つは、理性について教え、血肉化させることにあると思われるからである。

3位の骨董商のマダムは、後述するようにこの映画の中で最も重要な役割を果たしている人物であると考えられるにもかかわらず、支持者の数は最も多いわけではない。おそらくその原因の一つは、マダムが比較的高齢の設定となっていることや、その性格的設定の

あり方から映像としてのエネルギー量が低いため、見るものの感情や感覚ではとらえにくく、むしろ思考や理性によってしかとらえることができないところにあると思われる。

以上 3 人の登場人物については支持者の差が 1 人から 3 人の間であるから、調査対象が違えば順位が逆転する可能性はある。ちなみに上位 3 位を%に直して 95%の信頼区間を計算すると次のようになる。

ボーイ	12.5% - 30.5%
エルザ	10.9% - 27.5%
マダム	9.3% - 26.1%

3 者の全体レンジに占める共通レンジは 64.2%となるから、調査対象が違えばマダムが 1 位に来る可能性は高いといえよう。ただ、誰が 1 位に来るかはその調査対象集団の個性を示していることは確かであろう。

4 位についても同じ計算をすると、共通レンジ部分は全体レンジの 32.7%となるから上位 3 位と入れ替わる可能性はより低い。その意味では調査集団が違ってても上位 3 位の関係は比較的安定している可能性が強い。

ボーイの恋人の女性はその「かわいさ」(回答者の言葉)を理由として同性の女子学生達によっても支持されている。学生達の回答によれば、ボーイの場合と同じくこの映画に明るさをもたらしていることも理由の一つのようである。学生達にはそのように受け止められているが、しかし、後述するようにこの女性は、その表面的な印象とは対照的なセリフを語るシーンがあり、謎を持った女性でもある。ただ、回答を見るかぎりでは学生達はそのことに気が付いていない。

この映画の中ではどちらかというと感情的で固定観念にとらわれ、被告エルザを有罪にする役割を担っている軍人の陪審員や農民の陪審員にも支持が集まっている点がこの集計の特徴である。軍人の陪審員については、頑固ではあるが家族にとって頼れる人物像として描かれていると考えられるから、支持が集まる理由は明らかであるが、農民についてはそのような理由は必ずしも明確なたちではみつけれられない。支持している学生達が書いている理由としては、農民の陪審員の素朴さがある。しかし、妻への態度は高圧的で猜疑的あるから、必ずしも肯定的な意味で素朴とはいえないだろう。

以上みてきたように、学生達が好きな登場人物は広がりを持っている。それは人間の感じ方の多様性を示す一つの例である。

③この映画ではどうして登場人物の私生活が描かれているのでしょうか。

同じような陪審制映画のアメリカ映画『12 人の怒れる男』や日本映画『12 人の優しい日本人』と比べた場合のこの映画の特徴の一つは、陪審員としての議論の場面が相対的に少なく、それぞれの陪審員の私生活がより多く描かれている点である。それはすでに見たよ

うに、観客にとっては映画の理解を難しくする面がある。製作者達はその欠点を自覚していたかどうかは分からないが、私生活に重点を置いたことが意図的であることは、その映画に占める時間的割合から言ってもほぼ間違いないと思われる。ただ、すべての陪審員について同じ程度に私生活が描かれているわけではない。ホテルに泊まっていた陪審員の一人の男性についてはほとんど私生活が描かれておらず、マダムとのホテルでの会話と自宅への電話だけが私生活として描かれている。ホテルに泊まっていたもう一人の陪審員の骨董商マダムの私生活については、犬が好きであることと、ホテルでのクレメールへの好意的関係（または恋愛関係ともいえるが、そのことについて断定できる根拠はない。）についてだけ描かれている。その二人以外の残りの5人の陪審員についてはほぼ同じウエイトでそれぞれの私生活が描かれているといえる。

そして、それぞれの陪審員の私生活と被告エルザの安楽死殺人の動機についてのそれぞれの陪審員の推論は対応関係にある。

まず、軍人の陪審員の場合には軍人であったことを反映してフランスへの愛国心が強く、彼のせりふが証明するように、外国人である被告エルザへの反発が推論に影響している。加えて、最後の判決審議での彼の発言が示すように、自分の娘達が結婚相手を見つけられず独身であることが二人の愛人を持ったエルザへの反発を強めていて、エルザが遺産目当てという動機で殺したと彼は推論する。

農民の陪審員の場合には、陪審員に選ばれたという通知が届いたときから一貫して受け取るお金の問題を語っており、また中断せざるを得なかった農作業へのこだわりを見せている。さらに、自分の妻と雇っているイタリア人青年との間の不倫を確信するシーンがあり、そのことは、被告エルザの最初の愛人関係や、別の愛人への心移りへの反発となっている可能性があり、おそらくはそれらの心理に基づいて彼は、被告エルザの安楽死殺人の動機を金目当てと断定する。

子供が障害児であり印刷所を営んでいる男の場合には、自分がカトリック教徒であるということが、エルザが有罪か無罪かの判断の基礎を構成している。私生活として描かれているのは障害を持った彼の子供の暴力事件を中心とした精神的苦痛であるが、その私生活の状況がカトリック教徒としての判断を強める役割を果たす形で描かれている。そして彼は、他人を裁く基準は自分ならばどうするかであり、カトリック教徒の自分ならば殺さないから、被告エルザは有罪であるという結論を出す。そのことからわかるように、彼がフランスの典型的なカトリック教徒の判断のパターンを代表している可能性も否定できない。

その名前や私生活から、おそらく貴族出身であると推測される陪審員のモンテッソンの場合には、私生活の中では、それまでつきあっていた女性との関係を切り、別の女性と結婚する予定になっているにもかかわらず、前の女性につきまとわれている。自分につきまとう女性への嫌悪感を中心とした女性観と、さらには、自分自身の結婚相手の選択動機そのものから、被告エルザの動機を推論し有罪とする。

学生に一番人気があったカフェのボーイの場合には、それまで親に反対されていた恋愛

が、陪審員に選ばれたことが原因となって結婚を許されることになるというかたちで私生活が描かれている。そして、自分達の恋愛関係の成功の喜びを被告エルザと愛人クレメールの恋愛に移し入れて被告の動機を推論し、エルザを無罪とする。

ホテルに泊まっている男性陪審員の場合は、私生活との関係付けはほとんどなされておらず中立的で客観的な判断者としての役割を果たしている。ただ、被告の愛人クレメールへの反感やマダムへの好意がなんらかの影響を及ぼしている可能性があるが、映画の中ではそれは明示されていないといえるだろう。彼の立場が示されているのが、映画の最後の陪審員達の議論のシーンである。モンテッソンが、被告エルザの動機について「私は客観的に裁いた。」と述べたのに対してその男性陪審員は反論する。

「いや、…あなたは自分の気質で被告を裁いた。」

(これはフランス語ではセリフとして出ているが、日本語には訳されていない。)

「あなたのいうことは、自分ならば、金のために人を殺すということを白状しているようなものだ。」

これらのセリフは、製作者達が、映画のテーマの一つの総括として、ここでその陪審員に語らせている可能性がある。

陪審員のマダムの言動の場合には、先の5人の陪審員の場合とも、また、その男性陪審員とも違ったものとして位置付けられるが、彼女の言動についてはより重要な問題を含んでいるため、別にわけて後述することにする。

以上のことから、陪審員の私生活がなぜ描かれているかということは、比較的分かりやすい問題であるといえよう。さらに加えて、そのことを観客に印象付ける可能性のあるシーンが判決後に置かれている。モンテッソンが、つきまとっていた前の恋人が自殺したということを判決後に母親から知らされるシーンがそれである。自殺を初めて知ったモンテッソンは判決前にそのことを知っていたなら被告エルザを無罪にしていたというようなことを暗示する。すなわち、彼はそのセリフによって、被告エルザへの自分の判断が私生活の中での前の恋人への感情に依存しているということを告白している。モンテッソンのこの最後のセリフは、この映画のテーマの一つについての最終的なまとめとも呼べるものであろう。

そのセリフによって言葉で直接的に語られていることが、おそらく決定的な役割を果たして、なぜ私生活が描かれているかという問題についての回答は学生達にとって比較的容易であったと思われる。実際、私生活が判決に影響していく関係を示すためといった回答を出している学生の数79人中59人おり、割合に直すと74.7%になる。95%の信頼区間を計算してみると、84.3%から65.1%の範囲となる。すでに触れたように、ストーリーの構成全体が分かりづらいにもかかわらず、この問題について最低でも65.1%のレベルを維持していることは、学生達にとって印象に残りやすい問題であったことを証明している。だとすれば、なぜ25.3%の学生には理解できなかったかということが逆に問題にな

る。なぜなら、そのことは学生の間にある映画への理解力、更には現実への理解力の差の大きさを示している可能性があるからである。そしてその差を生み出している能力は受験学力の測定基準では測定できない可能性がある。その意味で重要な問題といえるので25.3%の回答の一部を紹介する。

「登場人物の私生活を描くことで、判決を下す陪審員が一般の市民として生活している様子を描いて法廷がフランス市民の生活に無関係でないことを示したかったから。」
「陪審員もしょせん普通の人間でみんなと同じふつうの生活をしているということを表したかった。」

「登場人物が一般社会で生きる人々、つまり観客の一人でもありうるということを強調するため。」

これらの回答も決して間違っていない。そのような意図も二次的なものとしては製作者側にあった可能性がある。しかし、理由についての推論としては一般的であり、問題やテーマが絞られていないという点で表面的なとらえかたであり、不十分である。したがって25.3%の回答は、「なぜなのか」という課題を探究する能力の不十分さを示している可能性があるといえるだろう。そしてそのことは、この映画が受験教育によっては測定できなかった学生の力を測定することに役立つということを明らかにしているといえるであろう。

④この映画の中で、「偶然」について触れられているシーンをすべて上げて、なぜそのように描かれているか考えて書いて下さい。

この映画の中で偶然というものについて触れられているシーンがいくつかある。その例をあげると次のようになる。

- ・農民の妻が野の花を胸につけているのに対して、イタリア人の若者も同じような花を胸につけているという偶然。
- ・被告のエルザが新しい愛人と会っていることを目撃された夜にそれまでの愛人に対して安楽死殺人を試みることを。それが偶然の一致なのかどうかという問題。
- ・陪審員が偶然によって選ばれていることについてのボーイの批判。
- ・マダムとクレメールとの私的会話の中に「偶然」という言葉が出てくるシーン。

偶然というものについて触れられているそれらのシーンで、時間的長さやストーリーの展開からみてより重要な意味を持っていると考えられるのは最初の二つである。まず、農民の妻の胸につけられていた花とイタリア人の若者の胸の花は、農民の陪審員にとって、妻の不倫の決定的な証拠となっている。そしてそのエピソードの途中で妻は、「うわべで

ものごとを判断しないで！」と夫に向かって反論する。

被告エルザに関する偶然は、エルザが遺産目当てに安楽死殺人を行ったかどうかという判断にとって重要な根拠となりうるものとしてある。これが偶然の一致であれば、エルザの動機が遺産目当てではなかった可能性が高まるし、意図的な一致であれば逆に become という分岐を意味している偶然である。このような偶然の一致が、どのように被告にとって不利に働くかという例を製作者側は農民の陪審員と妻との関係において示しているとともに、それがうわべで判断することではないかという疑問を農民の妻のセリフを借りて観客に伝えているともいえるだろう。ただ、この二つのシーンの一致も製作者側の意図には無関係な偶然の一致である可能性も全くないわけではない。しかし、農民と妻の関係のシーンの長さや詳しさからいうと意図的に設定されている可能性が強いといえる。加えて、農民の妻のセリフのようにこの映画の中心的な問題に関係するセリフが一見すると無関係に思えるシーンで語られるというケースが他にもあることを考えると、偶然の一致である可能性は低下する。

このような偶然の一致の問題は、この映画だけではなく、カミュの『異邦人』の裁判シーンの中でも意図的殺人かどうかに関係する問題として出てくる。また、現実の事件においても偶然の一致が冤罪を引き起こした事件として長野におけるサリン事件をめぐる冤罪問題が関係するだろう⁶⁾。それらのことからいっても、この映画の中での偶然についての問題について気が付くということは、現実を正確に認識する実践的力を育成するという意味で重要であると思われるが、学生達の回答数は、79人中18人であり比率では22.8%である。95%信頼区間では、13.5%から32.1%となり、前の問題についての回答率と区間の重なりがないことからみて一般的にこの問題は、前の問題よりも認識するのが困難であるということになる。散在しているシーンについての認識を前提としている問題であるから、この問題への解答は観察力や感受性の鋭さに依存している可能性が強いといえよう。

回答率は低いが、しかし、この偶然の一致の問題は、科学や学問にとって重要な意味を持っている。なぜなら、科学や学問というものが現実や事実の中にある関係、とくに必然的関係の認識を目的とするものであるとすると、偶然の一致による関係を、必然的関係と誤認することは大きな誤りとなるからである。その意味で、この偶然の一致の問題に気がつき、その問題を考えるということは科学教育という立場からみて大切なことになる。

⑤この映画の中で女性と男性はどのように描かれていますか。そこから、この映画の製作者は女性についてどのように考えていると推論できますか。

この質問については、女子学生を含む88.6%の学生が、女性が男性よりも劣ったものとして描かれていると答えている。95%の信頼区間は81.6%から95.6%となり、最大値であった場合にはほとんど反論なく回答が正しいように思われることになりかねない。しかし、映画の内容を女性に焦点を合わせて分析すると、それらの回答に矛盾することがらを発見できる。たとえば、被告のエルザもエルザの義理の妹も医者で、かつ知性的な描かれ

方をしているという事実がある。エルザの義理の妹はエルザよりも激しい感情を持っている人間として描かれているが、しかしその彼女も、エルザへの攻撃的証言の中でさえ「根拠がないことについては断定できない」といったセリフを述べてその科学的知性を証明している。

この映画の中で、女性蔑視がはっきりと現われているシーンは、陪審員のボーイが地下のワイン倉庫の中で自分の恋人に向かって「女性に裁判のことは分からない。」と言うシーンである。その恋人がすでにふれたように「かわいい」女性であることもあり、そのセリフと重ねて考えると、女性蔑視だけを表現しているシーンのように見えるが、しかし、ボーイがそのように言ったとき、恋人は次のようなセリフで反論している。「真実は誰にも分からない。」そしてこのセリフの内容が、映画の最後のナレーションでもそのまま語られることになる。その意味でボーイの恋人の女性は製作者の意図を代弁する役割を果たしている可能性があることになる。

女性に対する蔑視をセリフで直接的に語っているという意味では、ボーイよりもモンテッソンの方が代表的人物といえるだろう。女性の心理についての分析やエルザの動機についての推論には他の陪審員が非難するように女性についての偏見や差別観が強く現われているといえる。しかしそのモンテッソンさえも最後のシーンで自殺した恋人の性格の優しさを高く評価し、また、エルザへの自分の判断を後悔している。彼の女性についての差別的発言が彼の本当の気持ちではなかったのではないかということを考えさせるシーンである。

さらに決定的なことはこの映画の中で、犬をつれたマダム、すなわちただ一人の女性陪審員が果たしている役割である。彼女がどういう役割を果たしているかということを考えると、この映画では女性が劣ったものとして描かれているのではなく、逆に男性と対等か、それ以上のものとして描かれているということに気が付く。マダムについての分析は後述するが、マダムについてここで触れなくても、すでに述べたことから女性が劣ったものとして描かれていないことはいえるだろう。

そのことに気が付いた学生は79人中9人であり、全体の11.4%である。95%の信頼区間でも4.4%から18.4%であるから、これまでの質問の回答の中では最も低いレベルにあり、この問題の理解が容易ではなかったことが分かる。最初に回答学生79人の構成について述べたように回答者の79.7%が女性であるにもかかわらず、こういう結果に終わっている点が疑問として生じる。

⑥この映画から、人間が事実や現実を正確に認識するときに何が最も大きい障害になると考えることができますか。

この質問は、質問③をより一般的な視点からとらえなおしてもらったためのものであり、回答結果は質問③のそれとほぼ対応したものになっている。この質問に最も一般的なかたちで回答するならば、答えは「現在の自分そのもの」ということになる。自分を作り上げ

ている感情も主観的考えも、偏見も、先入観もすべて含んだ「自分」が事実や現実をとらえる上での最も大きい障害である。それは問題としては「自己中心主義」の問題であり、事実や現実を正確にとらえるためには、すなわち科学的認識のためには、絶えざる「自己中心主義からの脱出」(J. ピアジェ)が必要であるという科学的精神にとって最も重要な問題のひとつに関係してくることになる。そのような一般的問題を考えるきっかけになるものとしてこの映画の陪審員の私生活と判決の関係があるといえるだろう。

学生達の回答をみると、そこまで一般的な問題としてとらえている学生はおらず、ほとんどがこの映画に即して部分的な問題を指摘している。それらの回答の中で比較的抽象度が高いかたちで問題を捉えている例外的な回答を引用してみよう。

「事実や現実を正確に認識することが果たして可能なかどうか私にはわからない。ある事柄、事件を前にしたとき、私達はそれに対して意味付け、判断、解釈などを通じて認識する。そうした行為の根底にあるものが、私達の生まれ育った文化、風土、または生活環境であるために、人間の認識は個々によって千差万別である。そのために正確に認識するという言葉自体が非常に繊細な定義を必要とすると思われる。」

2年生 K. D.

自己中心主義という言葉は用いてないが、自己中心主義が、現実や事実の正確な認識すなわち科学的認識におよぼす影響というものをほぼとらえているといえるだろう。同じような学力水準で大学に入学しているにもかかわらず、ほとんどの学生が答えられない問題について、この学生のようなレベルの高い答えを示す学生が出てくるというばらつきの原因を明らかにしていくことは、科学教育という面からみて重要な課題であると思われる。

⑦この映画で、陪審員の夫婦の障害児についての描かれ方や、カフェのボーイとタクシーの運転手との乱闘シーンの描かれ方に共通することは何であり、それはなぜでしょうか。

陪審員の夫婦の障害児の描かれ方の特徴は、障害児が暴力をふるうシーンや障害児そのものが一度も出てきていないことである。音などの想像を掻き立てる可能性のあることがらで間接的に示していることが描かれ方の特徴といえる。また、カフェのボーイが裁判所に行くために乗ったタクシーの運転手と乱闘になるシーンがあるが、そのシーンも直接的には描かれておらず、タクシーのヘッドランプの側面に乱闘が映るという描かれ方がされている。それらに気が付くと、暴力に関するシーンがなぜそのような描かれているかの疑問が生じる。もちろん、それが単なる偶然である可能性もある。しかし、その問題に気がついて映画を振り返ってみると、映画の冒頭のシーンでマダムが語っているセリフとのみえないつながりが見え始めることになる。マダムはそのシーンで「暴力というのはたと

え小説の中であっても嫌いである。」と語っている。

そのセリフから考えると、障害児に関係するシーンも、乱闘シーンも監督が意識的にそのように描いているという仮説の正しが増加することになる。ただ、製作者側自身が暴力シーンの回避を望んでいたのか、観客のためにそのようにしたのかまではわからない。

この問題についての学生達の回答をみると、マダムのそのセリフにまで気がついた学生はいないが、残りの二つのシーンまたは片方のシーンの特徴に気が付いた学生は79人のうち22人、27.9%である。95%信頼区間では18.0%から37.8%の範囲となり、過半数を割っている。それは、学生達の観察力や感受性の低さを示唆するデータであるだろう。22人の学生が気が付いているがしかし、その理由について書いている学生はほとんどいない。冒頭のマダムのセリフについて覚えていなくても、ある程度の推論は成り立つと思われるにもかかわらず理由についてほとんど書かれていない。その原因については不明である。ただ、暴力シーンがあふれている現代の映画やテレビに慣れている可能性が強い学生達にとって、製作者側が暴力シーンを好まないゆえにそのような描きかたがなされているということに気付きにくかった可能性はあるだろう。

この問題で重要な点は、製作者側の意図をマダムが語っているということである。すでにみたように、製作者側の意図をボーイの恋人の「かわいい」女性が代弁し、農民の陪審員の妻が代弁し、マダムが代弁している。その意味で、このマダムのセリフは先に触れたこの映画の中での女性の役割の一つの例であるとともに、マダムがこの映画の中で持っている意味を示唆するものであるともいえるだろう。

⑧この映画の中で、骨董品の商売をしていて、犬を連れてきているマダムはどのような意味を持っていると考えられますか。

先にみたように、登場人物の中での好感度が3位であったこのマダムは、映画の中では他の陪審員達とは違った描かれ方がされている。他の陪審員達は、自分のそれまでの人生経験や現在置かれている私生活の状況を反映したかたちで被告エルザの動機についての推論を立てている。すなわち、自己中心主義的に事実認識を行っている。それに対して、マダムは逆の事実認識を行う。そのことを詳しくみてみよう。

まずこのマダムの場合は、ホテルに宿泊しているため、私生活としてはホテルでの生活が描かれている。ホテルで出会った自分より若い男性クレメールに対して好意を抱くが、クレメールは実は安楽死させられた愛人とは別の、エルザの愛人であり、証人として突然法廷に呼ばれることになる。出廷の前日にクレメールは、自分がエルザの愛人であり、エルザを助けるために陪審員であるマダムに意図的に接近したことをマダムに打ち明ける。

その告白に対して、マダムは目に涙を浮かべながらその仕打ちを許すことができないことをクレメールに伝えている。そればかりか、ホテルに伴っていた自分の愛犬を置き忘れてその場から立ち去っている。そのことは、マダムの心の中の悲しみや怒りの大きさを暗示するものでもあるだろう。ただ、マダムが感情的ではなく、また、自分の感情を外に出

さない人間として設定されていることなどから、悲しみや怒りの大きさは映像の上では観るものにそれほど印象に残るかたちでは描かれていないといえるだろう。だから、マダムの心の中についてはなおのこと、観客は推論によって理解する以外にないことになる。その意味でこのマダムをどのように理解するかは、観るものの推論力のレベルを示している。

私生活の面では、マダムは被告エルザとその愛人のクレメールの裏切りに対して怒りの感情を抱き、農民の陪審員や軍人の陪審員、さらにはモンテッソンのようにエルザの動機について否定的な結論を出しておかしくないにもかかわらず、彼女は翌日の判決討議の場で、そのような行動をとっていない。すなわち彼女は、自分の私生活の経験から来る私的感情に左右されずに、被告エルザの動機を客観的にとらえようとしている。実際、映画の中でも、同じホテルに宿泊している男性陪審員が判決討議のシーンで、マダムが客観的に判断したことを賛美している。同じホテルのその男性陪審員のこの映画の中の役割は、そのことからみると、男性陪審員達の判断が主観的であるのに対して、マダムの判断が客観的であることを明確にすることにあつたともいえる。

映画全体としては、私生活を含む自分自身というものが事実を客観的にとらえることを妨げていくという側面を描いているなかで、女性の陪審員のみがまったく逆の行動をとっていることになる。すなわち、判決の公正さや正義という面からいうと、このマダムだけがそれを意識的に実現しようとしていることになる。そのように考えるなら、この映画においてマダムが果たしている役割はその映像が観客に与える可能性があるインパクト以上に重要であることになる。

このようなマダムの役割について何らかのかたちで気が付き、回答として書いている学生は、79人のうち19人、全体の24.1%である。95%信頼区間でみると14.7%から33.5%の範囲である。データからみると回答率がそれ以下のデータがあるという意味では、今回の調査の中ではそれほど低い値ではないが、映画におけるマダムの役割の重要性という視点からみると、やはり低い値とせざるを得ないだろう。ただ、映画の中でのマダムの描かれ方にもその回答率の低さの原因がある。すでに触れたように映像という面からみるとそれほど印象に残らない可能性があるから、感覚や感情による認識にのみ頼っている場合には、このマダムのことに気がつかない可能性が強い。すなわち、マダムのような人間像への憧れや、何らかの価値評価がすでに観る側にある場合や、先述したようにマダムの心の中への推論力がある場合にのみ、マダムというものが直接感覚に訴えるエネルギー以上に印象に残る可能性があるということである。それは、このマダムという人間像が、観客にとっての試験紙でもあることを意味している。すなわち、この映画のマダムという人間像に気が付くか否かということによって自分の中にある価値観や思考力が測定されるという側面である。

マダムのような行動が成り立つために必要なことはいくつかあるが、最終的に必要なことは理性的意志であるだろう。自分の中に生じたクレメールやエルザへの怒りや悲しみ、さらには嫉妬という感情に左右されずに客観的な判断を下せるためには、自分の感情をコ

ントロールできる力が必要であり、その力こそが理性的意志にほかならない。したがってこの映画の中では、マダムは理性的意志を象徴する人物として描かれていることになる。学生達の回答では、「感情を抑えて」、「冷静に」、「公正に」などの言葉は多く使われているが、理性という言葉を用いている学生は19人中3人、15.8%である。基準となっている人数そのものが19人であるから、比率そのものの信頼度は低い。そのため一般的にはいえないが、「理性」という言葉は学生達にとっては使われる頻度の低い言葉であるといえる可能性もある。そのことはまた、日本の文化や人間関係の中での「理性」や「理性的意思」というものに与えられている価値の低さを示している可能性も考えられる。

⑨カフェのボーイはどのような意味を持っていると考えられますか。

最後の質問項目であるこの質問は、ボーイに対する学生達の支持率が高いだけに意味があるといえるだろう。

この陪審員のボーイは映画の中で二つの側面を示している。一つはタクシーの運転手との乱闘などからわかるように感情的な側面である。しかし、他方では途中の裁判の場面でも、最後の判決審議の場面でも、論理的で理性的な側面を示している。その両面があるからこそ、学生達に好感を持って迎えられているといえるが、そのような両面と職業から考えてこのボーイは、典型的なフランス人を表している可能性がある。ボーイとフランス人一般とのそのような関係の側面について何らかの回答を書いている学生は12人、全体の15.2%である。ボーイが好きであると答えた人数が17人であったことを考えると、この回答率は低いといえよう。そのことは、登場人物を個人的な感情の部分ではとらえることができて、より広い視野からの推論的認識はそれほど容易ではないことを示しているともいえるだろう。その意味で、このボーイという登場人物の把握は、日常の人間関係における人間理解のレベルを示唆する教材の役割も果たすであろう。

学生達の回答の中では、そのことについて触れているものがまったくないが、このボーイについては別の重要な側面がある。それは、このボーイが陪審員に選ばれたことによって人間として変わっていくということである。その変化については映画の中でもセリフとして直接示されており、またその変化が恋人との結婚の許可の原因になっていくから、学生達がそのことに気付きにくいというわけではないだろう。にもかかわらずなぜか学生達はそれを回答に表していない。陪審員の中で、陪審員に選ばれたことに誇りを持ち、責任を持って判決を出そうという姿勢において、このボーイは特徴的に描かれている。そして、その責任感こそが、ボーイを人間的に変化させた原因であろう。この変化は、法律的面からみれば素人によって構成される陪審制が、予想された以上の役割を果たしうるといふ人間の持つ可能性の側面を考えさせる上で重要であるが、学生達の回答を見る限りはそのような教材として役立っていないといえる。

ボーイのように人間として変化していく登場人物は、教材としての映画において重要な役割を果たす可能性がある。映画を観る学生で、その変化する姿に同化することができる

学生は、自己の成長を登場人物の変化に重ね合わせることが可能だからである。おそらく、その登場人物が、映画を観る学生と同じ年令層でかつ変化が明確であるほど、同化しやすいと思われる。この映画の場合、年令的には同化可能であると思われるが、学生達の回答に変化についての指摘がないところからいうと、変化が必ずしも明確に描かれているわけではなく、そのことが学生達の同化を困難にしたと思われる。実際、映画の中では言葉としてボーイが変わったと言われているだけであって、変化する前のボーイはほとんど描かれていないからである。その意味では学生達が自分を同化させて変化を学ぶ教材としては欠点を持っている。

結論

以上みてきたことから、この『裁きは終りぬ』を科学教育教材としてみた場合、他のふたつの陪審制映画と比べるといくつかの長所があるといえるだろう。その一つは、他のふたつの陪審制映画に比べて、自己中心主義の問題を考えるための材料が詳しく描かれている点である。しかも学生達の回答にみるように大多数の学生がその問題、すなわち自分の人生や私生活が事実認識に影響するという問題をとらえているから、学生達にとっても理解しやすいというメリットを持っている。他のふたつの陪審制映画の中にも個別的な陪審員の問題としては自己中心主義の問題が出てきている。しかし、それらは言葉での説明としてか、暗示的にであって、自己中心主義を形成する根拠である私生活まで具体的に映像として描かれているわけではないので、観るものへの影響はその分だけ少なくなるといえるだろう。科学教育にとって最も重要な課題である自己中心主義の問題について現実的な関係の中で明確に自覚させるという意味で、この映画は科学教育教材として高い評価を与えることができると考えられる。

偶然の問題については、学生達の回答が示すように理解しにくいといえる。偶然の問題は、科学的認識においてのみならず現実の人生においても思いがけない役割を果たす可能性があるだけに、科学教育においてそれを教えることは重要なテーマのひとつであると思われるが、この映画では問題が散在するために簡単には理解できないという限界がある。その意味では、科学教育教材としては不十分である。

女性の描かれ方は、作られた時代状況を考えると先進的といえるだろう。しかも女性がこの映画で果たしている役割は、マダムの例を根拠にすれば決定的ともいえる。それだけに女性のための科学教育教材としてより有効であると思われる。しかし、今回の学生達の回答を見るかぎりには、その面が学生達には十分に理解されていないという限界がある。ただ映画を観たあとに教師が詳しく分析するならば、その有効性がより現実的なものとなるだろう。

おそらく、この映画が他の陪審制映画と比較した場合に他にはない長所として持っているのがマダムの生き方とそれを支える理性の問題である。比較の対象としている他のふたつの陪審制映画においては、登場人物は、基本的に例外なく自分の感情の示すところに従って行動しており、自分の自発的意志によって自分の感情が指し示すものとは違った行

動をとるような理性的行動のモデルはみあたらない。しかし、裁判においてだけではなく、科学や学問においても、自分の感情をコントロールし自分の感情が示す方向とは別の行動を取ることができる力が必要である。たとえば、現実や事実が示すものが自分の感情を刺激し、現実や事実そのものを否定しようとする自分の感情が働くような場合には、理性的意志なしには、事実や現実を正確に認識することやさらには受け入れることができない。その現実や事実が、それまでの自分の考えや思考のパラダイムを感情的に脅かすような場合を考えるなら、そのような理性的意志は、パラダイムの破壊を不可欠とする独創的研究のためにも必要であることが分かる。

それらのことから、この映画のマダムの姿が教師の分析により、文字教材よりも学生にとって印象に残るとすれば、この映画は貴重な科学教育教材ということになるだろう。全体としてみると、この『裁きは終りぬ』は他の陪審制映画が持っていない特徴をもっており、その意味で科学教育教材として評価できるが、しかし、学生達の反応にあるように分かりにくいことが難点である。そのことは、アメリカ映画『十二人の怒れる男』との比較の場合に更に明確になる。そのため学生達は1回だけ観て詳しい説明を聞かなければ隠された内容の意味が理解できずに、ただおもしろくない映画とだけ位置付けられる危険性がある。それを避けるためには、映画を観たあとに、重要なシーンをもう一度繰り返しみながら製作者側の意図についての詳しい推論を紹介することが必要であると考えられる。

そのような詳しい説明の必要性は、教材として優れた価値を持つと思われるいくつかのフランス映画に共通することでもある。

この『裁きは終りぬ』のように、一見しただけでは面白くないか、暗い気分させられる映画が、科学的な分析によってその裏に隠された謎と答えが明らかにされるといふ新鮮なおどろきを学生達を感じるならば、平凡で退屈な日常の現実も含めて、どのような現実であろうとそれを科学的に分析することの必要性和面白さを学ぶことに役立つであろう。映画というものは現実そのものではないにしても、文字教材よりも現実に近いものであるがゆえに、なおそのような役割を果たす可能性があるといえる。おそらくは、今後分析予定のアメリカ映画『十二人の怒れる男』や日本映画『12人の優しい日本人』よりも学生達にとっては面白くないにもかかわらず、フランス映画の『裁きは終りぬ』を見ることに別の重要な意味があるとすれば、その点にあると思われる。なぜなら、そこにどれだけ、独創的で重要な問題と解答が含まれていようと、認識の光があてられるまでは、すなわちそこに新しい事実や論理が発見されるまでは、現実というものが人間にとって平凡で、退屈で、ある場合には暗い日常にすぎない可能性があるからである。

注

- (1) 「社会科学教育における劇場用映画の役割（Ⅰ）理論編」（『視聴覚外国語教育研究』第19号，1996年，大阪外国語大学）
「フランス映画『Le vieux fusil』からみた個人主義」（『視聴覚外国語教育研究』第20号，1997年，大阪外国語大学）
「ふたつのフランス映画への学生達の反応とそれらが科学教育において持っている意味—新しい大学教育へのひとつの実験的試み—」（『études françaises』第35号，2002年，大阪外国語大学フランス語研究室）
「フランス映画を用いた推論力育成授業—課題探求能力育成のための実験的試み—」（『大阪外国語大学論集』第28号，2003年，大阪外国語大学）
- (2) Jean TULARD, Dictionnaire du cinéma - réalisateurs - Editions Robert Laffont (1987, Paris) p.147
- (3) 私生活に関するシーンは合計で60分であり，上映時間全体の56%にあたっている。
- (4) シドニー・ルメット監督『十二人の怒れる男』，1959年 (<http://www.allcinema.net>, <http://us.imdb.com>, アクセス日は2003年10月1日)
- (5) 中原俊監督『12人の優しい日本人』，1991年作 (<http://www.allcinema.net>, アクセス日は2003年10月1日)
- (6) 熊井啓監督『日本の黒い夏 一冤罪一』，2000年作 (<http://www.allcinema.net>, アクセス日は2003年10月1日)

(2003. 10. 8 受理)